

極小未熟児の身体発育における体格栄養状態の検討

(分担研究：新生児・乳児の栄養管理に関する研究)

研究協力者 山口 規容子

要約：極小未熟児の乳児期および幼児期の体格および栄養状態について検討した。

乳児期においては、修正6ヵ月時にカウプ指数で評価すると、39%に15以下のやせがみとめられ、出生体重1000g未満のSFDにその傾向が著しかった。

幼児期では、肥満度で評価すると、-10%以下のやせが、35.3%にみとめられ、健常児との間に有意差をみとめた。

見出し語：極小未熟児、身体発育、体格栄養状態

研究方法：対象は、当施設で管理した極小未熟児（出生体重1500g未満）で、単胎出生、修正36ヵ月以上follow up、重度の神経障害をみとめない51例である。乳児期（修正6ヵ月時）、幼児期（修正36ヵ月時）にそれぞれ、カウプ指数、肥満度をもって体格および栄養状態を評価した。

結果：乳児期の体格は、出生体重1000g以上群のAFDが最もよく、正常範囲15~20が72.2%で、やせ（15以下）は、11.1%であった。超未熟児群は、やせの傾向が著しく、とくにSFDは、正常範囲が20%に過ぎずやせは80%を占めた。

乳児期の体格は、肥満度をもって評価し、健常時（同年齢）の対照群と比較し、修正36ヵ月で検討した。

肥満度10%以下のやせは、極小未熟児では35.3%を占め、対照健常児群の4.2%との間に有意差をみとめた。

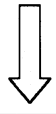
やせの傾向は、超未熟児につよく、1000g以上群との間に有意差をみとめた。

考察：極小未熟児の乳児期および幼児期における体格、栄養状態は必ずしも良好でない。すなわち、やせの傾向が明らかであり、出生体重の少ない群、1000g未満の超未熟児群においてより著明である。

これは、極小未熟児の身体発育のcatch upが、幼児期までは、身長が体重に先行するのでやせの傾向になると思われるが、その後の経過を注意深くfollow upすることが必要である。

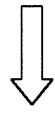
また、体格と栄養管理の関連性については、初期（NICU入院中）の栄養管理の重要性は、すでに報告した。

さらに、退院後の栄養管理の身体発育に与える影響については、今後十分検討されなければならない。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:極小未熟児の乳児期および幼児期の体格および栄養状態について検討した。乳児期においては、修正6ヵ月時にカウプ指数で評価すると、39%に15以下のやせがみとめられ、出生体重1000g未満のSFDにその傾向が著しかった。

幼児期では、肥満度で評価すると、-10%以下のやせが、35.3%にみとめられ、健常児との間に有意差をみとめた。